

# GLOBAL VOYAGE

[グローバル ヴォヤージュ]

November, 2017

Vol. 4

## 初夏の 北欧5カ国へ

特集

第二特集

ベネズエラ オーケストラ

[発行] (株) ジャパングレイス



# 北欧5ヵ国の船旅

清々しい初夏に訪れる

北欧全5ヵ国と北極圏をゆく、2018年5月出発の第98回クルーズ。初夏に訪れるこの船旅では、人々を魅了し続ける、まるで絵本の中に迷い込んだような美しい街並み、雄大なフィヨルド、そして幻想的な「白夜」が私たちを待っている。森と湖のヘルシンキ、水の都ストックホルム、中世の歴史が残るコペンハーゲン、フィヨルドが待つベルゲン、そして大自然のレイキャビク。あこがれの北欧全5ヵ国を一度で訪れる贅沢な船旅へ出かけよう――



 **Helsinki** [ヘルシンキ・フィンランド]

 **Stockholm** [ストックホルム・スウェーデン]

 **Copenhagen** [コペンハーゲン・デンマーク]

 **Bergen** [ベルゲン・ノルウェー]

 **Reykjavik** [レイキャビク・アイスランド]



  
**Nordic**  
five countries



## CONTENTS

### 特集

清々しい初夏に訪れる

## 北欧5ヵ国の船旅…… P2

### 第二特集

## ベネズエラ オーケストラ…… P9

PEACE BOAT NEWS

## おりづるプロジェクト…… P12

寄港地フォーカス

## インドネシア・バリ島…… P13

水先案内人インタビュー

## 枝元 なほみさん…… P15

洋上居酒屋

## 「波へい」にいらっしやい!…… P17

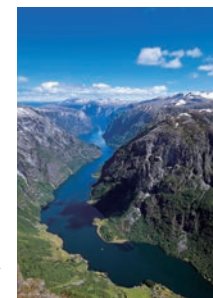


*Ocean Dream*

タヒチ・パペーテ港停泊中のオーシャンドリーム号

表紙の写真

ノルウェー・ベルゲンから行くソグネ  
フィヨルド。第98回クルーズで航行予定。





# Sognefjord

ソグネフィヨルド・ノルウェー



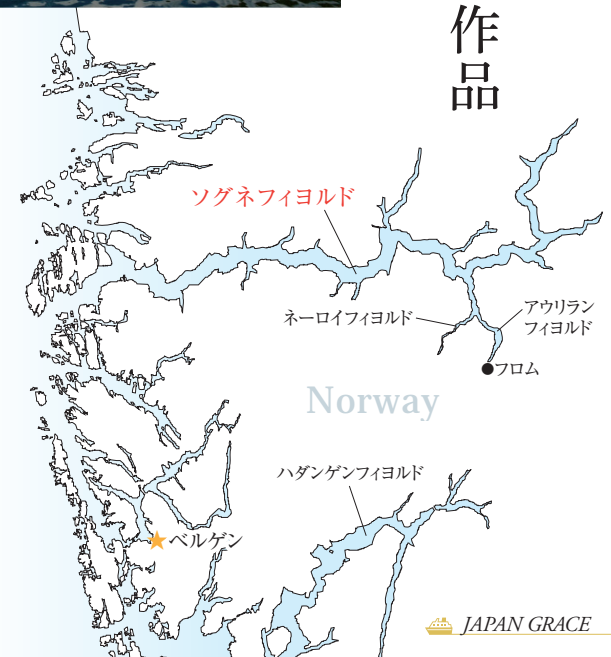
1:デッキから望む山肌は場所によって表情もさまざま。2:山間に並ぶ家はまるで絵本の世界に迷い込んだかのよう。3:ネーロイフィヨルドのあまりの狭さに乗船者も思わずそわそわする。4:これぞフィヨルドという壮大な光景の中、船はゆっくりと進む。



5:遊覧する船と並走してカモメが遊びに来てくれた。6:気が遠くなる程の長い歴史がこの急斜面をつくりだした。7:デッキの椅子はフィヨルド遊覧の特等席に。8:全長204kmを誇るだけあって遠くまで景色は広がる。9:フィヨルドをこの距離で見られるのは船旅ならではの。

誇るネーロイフィヨルド。ソグネフィヨルドの支流の一つで、一番狭い部分の距離はわずか250m。左右に迫る急峻な山々の迫力には圧巻のひとつだ。今なお刻々とその姿を変えるフィヨルド。この景色を見られるのは今の瞬間だけ。地球の壮大な歴史が生んだ芸術作品が私たちを待っている。

まるで別世界に迷い込んだかのようなダイナミックな光景。ここは全長204kmにも及ぶノルウェー最長のソグネフィヨルド。フィヨルドとは、氷河が数万年、数十万年の時間をかけてゆっくりと大陸を削り、そこにできた谷に海水が入り込んでつくられた奥深い入江のこと。眼前に広がる1000m級の美しい山々と入り組んだ海岸線が、地球の壮大な歴史を物語っている。穏やかな水面に映る航跡はいつになく美しく、ゆつたりとした時間の中、船は進む。しばらくすると山間のところどころでカラフルな小さな家々が見え、まるで絵本の1ページに吸い込まれたかのような世界が私たちを待っている。ソグネフィヨルドの支流奥深くに進むにつれ、次第に山肌が船に近づいてきた。ここはフィヨルド世界最狭を







ストックホルム・スウェーデン

## Stockholm

夏になるとオープンテラスで楽しく過ごす人たちが街は賑わう。



想像していたよりも小さいという声も多い「人魚姫の像」。



6



7

6:街中はカフェやショップも充実。人それぞれの楽しみ方ができる街だ。7:市内にある博物館や庭園は市民の憩いの場となっている。



## Copenhagen

コペンハーゲン・デンマーク

色とりどりの建物が並ぶニューハウンは必見。運河ツアーで街を一周するのもおすすめだ。



Denmark

## 豊富な歴史と童話が紡いだ 中世の歴史が残る「おとぎの国」

コペンハーゲンには、色鮮やかな建物が並ぶニューハウンをはじめ、中世の歴史ある建築物が今も多く残されている。市の条例により高い建物を建ててはいけなことが決められており「おとぎの国」と呼ばれるのにふさわしい美しい街並みが広がっている。

この街を訪れたなら見ておきたいのが「人魚姫の像」。アンデルセンの物語『人魚姫』をモチーフに作られたこの像を一目見ようと、ひっきりなしに多くの

観光客が訪れる定番の場所だ。この像のすぐそばにあるのは、カステレット要塞。もともとコペンハーゲン港の入り口を防御するために造られたが、今では赤レンガと深い緑のコントラストが美しい公園として人々の憩い場になっている。その他、1843年に開園した世界最古のテーマパーク「チボリ公園」や、シェイクスピアの戯曲『ハムレット』の舞台として知られる世界遺産クロンボール城など、観光には困らない魅力的な街だ。



Finland

## ロシアと欧州の文化が交じり合った クラシカルな「森と湖の国」

たくさんのカメメたちが、入港した私たちを迎えてくれる。港のほど近くにはマーケット広場があり、おしゃれでかわいい北欧雑貨から色鮮やかな野菜や果物、そして新鮮なサーモンのお店が並ぶ。ちよつと小腹を満たしてから街歩きに出かけるのもよい。

港から街の中心部までは徒歩で15分ほど。この街は帝政ロシア時代に遷都され、地理的な条件から今もロシアと欧州の間にあることを感じさせる独特の雰囲気漂う。中心部には大きな建物が並ぶが、フィンランドの6割は森で、湖が18万個あるといわれるほど自然も豊富。そのため中心

部とはいえ空が広く緑も多いため、街歩きをするにはとても気持ちがいい。この街で訪れておきたい場所の一つは街のシンボルである「ヘルシンキ大聖堂」。壮麗な佇まいもさることながら、ひととき目を引くのはその大きさ。薄緑色のドームが印象的で、ヘルシンキでもっとも古い歴史を持つ地区にあるため、現地の人々に親しまれている場所でもある。「ムーミン」の作者トーベ・ヤンソンの故郷としても知られるヘルシンキ。街並みのみならず、郊外のヌークシオ国立公園でのハイキングや農場見学など、のんびりと流れる時間も楽しめる寄港地だ。



2



3

1:整然とした街並みは北欧の旅の始まりを感じさせる。2:マーケット広場で食べるシーフードは絶品。3:緑があふれる街中には市民の足となるトラムも走る。



## Helsinki

ヘルシンキ・フィンランド

小高い丘の上にそびえる「ヘルシンキ大聖堂」。大階段に腰を下ろすと街を一望できる。



Sweden

## 映画のワンシーンのような光景が続く 「北欧で最も洗練された街」

2万以上の島々が連なる水の都・ストックホルム。近代都市でありながら中世の趣が残る見どころ満載の街だ。特に港からすぐのストックホルム旧市街・ガムラストン地区は美しく荘厳な景観が印象的。カラフルな建物と石畳、そして時折現れる細道。どこをへ

も積極的だったり、自然と共存した先進的な都市でもある。「北欧で最も洗練された街」といわれる所以は、街の所々で感じられるはずだ。



4



5

4:どこを切り取っても絵になる歩いて楽しい街だ。5:自然豊かな国立公園も観光スポットの一つ。

Norwegian Sea

スウェーデン  
Sweden

フィンランド  
Finland

ヘルシンキ

ストックホルム

デンマーク  
Denmark  
コペンハーゲン

ノルウェー  
Norway  
★ベルゲン



# Nordic Food & Goods

## フィンランド



スウェーデンやロシアの影響も受けた独自の食文化が発達。



フィンランドはサンタクロースの国としても知られる。

日本では買えないようなムーミングッズが充実。お土産にぴったりだ。

## スウェーデン



船旅だから北欧食器も安心して持ち帰られる。



北欧デザインの雑貨はお土産に人気。

サーモンのキッシュはボリュームもあって美味。

## デンマーク



新鮮なシーフードは北欧の国によっても食べ方はいろいろ。



豊富な種類のソースはサンドウィッチに最適。

クッキーの容器までとってもチャームング。

## ノルウェー



伝説の妖精トロルの衣装も人気。



日本でも有名なノルウェーサーモンを使った料理は美味。

スーパーマーケットには色とりどりのサラミが並ぶ。

## アイスランド



種類も豊富でラベルもかわいらしいシロップ。



トロルの置物はここでも。国によって伝わり方が異なる

北欧は魚料理がメイン。寄港地ごとの食べ比べもおもしろい。

世界最北に位置する首都として知られるレイキャビク。港から街を繋ぐ道は、どこまでも続く一本道。他の北欧の寄港地に比べ、何と言っても壮大な大自然が魅力の場所だ。もともとアイスランドは自然エネルギーを利用した施設が多く、地熱・水力などを使った「自然エネルギー先進国」と呼ばれるくらいだ。

その中でも地熱を活かした世界最大の露天温泉「ブルーラグーン」は観光客にも大人気。温泉全体を一周するだけで十数分かかるほどの広さで、それら一帯の青みがかった乳白色のお湯から湯気が立ちのぼる様子はとても幻想的。島の南西部一帯に広がる「ゴールデン

サークル」と呼ばれる大自然を感じられるエリアも必見。代表的な観光スポットの一つは迫力満点の間欠泉「ゲイシール」。熱水が噴き出す様子はまるで地球が呼吸しているかのよう。約4〜8分間隔で熱水が噴き出し、その高さは10〜20m、時には40mに及ぶこともあるという。それ以外にも、アイスランド語で「黄金の滝」という意味の「グトルフォス」では、幅70m、落差30mに渡って豪快に水煙を上げながら水が流れ落ちる。晴れた日には虹がかかり、黄金色に輝く様子からこの名前がついた名所だ。北欧のラストにふさわしい、地球の鼓動に触れられる魅力満載の寄港地だ。



5: 運がよければ虹がかかったグトルフォスの滝が見られる。6: 歩行者天国のゲートが自転車の形に。7: ブルーラグーンは現地の人もよく訪れる。8: 間欠泉は人と比較するとその高さに驚く。



## 地球の鼓動が聞こえてくる「自然と共存したエネルギー大国」



ベルゲン・ノルウェー  
Bergen

ハンザ同盟の中心地として中世に栄えた街・ベルゲン。当時貿易を行っていたブリッゲン地区には、世界遺産にも登録された色鮮やかな木造建築が立ち並ぶ。今では雑貨屋やレストランになっているこれらの建物は、当時は商人たちの事務所として使われていたという。このブリッゲン地区、木造建築の持つ暖かみからだろうか、街を歩いているとまるで中世にタイムスリップしたかのような不思議な感覚に陥る。

そんな街で食べるサーモンをはじめとした新鮮な魚介類は絶品。魚市場は買ったその場で食べられるイートインコーナーも充実していて、街歩きに疲れたらここで一息つくのもよいかもしれない。

魚市場から歩いて5分程の場所にはケーブルカー乗り場があり、ベルゲンの街と港が一望できる標高320mのフロイエン山頂上へ行くことも可能。フィヨルド遊覧の「入り口」にあたる港町ベルゲン。小さい街だけれども、ノルウェー観光には外せない街の一つだ。



1: 少し街を離れるとどかな風景が広がる。2: 歩いているとユニークな建物を発見。3: フロイエン山はハイキングコースもある。4: 教会は街のあちこちに。

レイキャビク  
★アイスランド  
Iceland



Reykjavik  
レイキャビク・アイスランド

おもちゃ箱のようにカラフルでかわいい世界が広がる。



## 中世にタイムスリップできる「フィヨルド観光の玄関口」



# ベネズエラ オーケストラの奇跡

—— 音楽が子どもたちを救う ——

無料音楽教育プログラム

## El Sistema

エル・システマ

貧富の差が激しいベネズエラの地で生まれた、子どもたちをオーケストラに無料で参加させることで犯罪や麻薬に走ることを防ぎ、社会参加を促す無料音楽教育プログラム「エル・システマ」。2006年から毎年交流を続けているピースボートは、今年、第94回クルーズで2つのプロジェクトを実施した。



1:20名の若き音楽家たちとデッキで集合写真。2:船内ではさまざまなシーンで素敵な演奏を披露してくれた。3:アブレウ博士(右)はピースボートに乗船したこともある。4:難民キャンプでも演奏者たちは大人気。

### ベネズエラとエル・システマ

ピースボートが毎年訪れている南アメリカ最北端の国、ベネズエラ。国別の原油確認埋蔵量は世界一を誇るが、近年では原油価格の下落により経済破綻を引き起こし、政治・経済社会不安というテーマでニュースに取り上げられることも多い。社会主義国家であるベネズエラにとつて、1920年代に石油が出現した頃から国としては急速に豊かになつていったものの、国内では貧富の差が発生。次第に街中にはストリートチルドレンがあふれ、犯罪に手を染める子どもたちが出てくるようになっていった。

そういった時代が長く続き、この状況が続いているベネズエラでは十分に楽器が揃つておらず、段ボールで作ったバイオリンで練習をしている子どもたちがいるのが実情。そのため、ピースボートスタッフが小学校などに電話をして使われなくなったものを譲ってもらうという地道な活動が続けて楽器を集めている。このプロジェクトは今年で10年目を迎え、今までで合計450台以上の楽器をベネズエラの子どもたちに届けてきた。

そしてもう一つの活動が、彼らをピースボートに招待するオンボードプログラム。第94回クルーズでは、団員の9割がエル・システマ出身者で構成される「カラカス市民オーケストラ」所属の若き音楽家20名がピースボートに乗船。来日して2週間は各地で演奏したり、ホームステイを体験したりし、4月12日の横浜港出航から6月22日のベネズエラ・ラグアイラ港寄港まで72日間をピースボートの船の上で過ごした。

を開しようとして立ち上がったのが当時文化大臣のホセ・アントニオ・アブレウ博士。自身が音楽家ということもあり「銃ではなく音楽を」というメッセージのもと、誰でも無料で受けられる音楽教育プログラム「エル・システマ」を1975年に創設した。たった11人の子どもたちを駐車場に集めて始まったこの取り組みは、今では78万人以上の子どもたちが関わっている大きなプロジェクトへと変貌を遂げた。世界的にも有名な、2017年のウィーンフィルハーモニーニューイヤーコンサート指揮者を務めたグスターボ・ドゥダメル氏もこの出身だ。

ピースボートがエル・システマに出会ったのは2006年のこと。ピースボートスタッフがベネズエラ寄港の準備で訪問した際、子どもたちが電車の床に着きそうなくらい大きな楽器を背負い、首都カラカスのエル・システマ本部に練習に通っている姿を目にした。音楽を奏でたいすべての人に門戸が開かれ、裕福な家庭の子どもから、そうでない子どもたちまで、オーケストラを通して協調性や自立心を学ぶ社会に惚れ込み、ピースボートとエル・システマの交流が始まった。

ピースボートが現在行っている活動は主に2つ。一つは日本国内でエル・システマのことを伝え、彼らのために楽器を集めるプロジェクト。いまだ貧困に悩ま

船内では大小合わせて100回以上の演奏を行い、洋上運動会では彼らがファンファーレを務めるなど、乗船者を大いに楽しませた。他にも全10回のチャリティー・レッスンが行われ、最後に受講者によって行われた「みんなのコンサート」では、「きらきら星」と「よるこびの歌」を大合奏。たった10回のレッスンとは思えないクオリティに会場は大きな拍手に包まれた。

彼らは後述する「おりづるプロジェクト」にも同行し、ギリシャではスカラマガス難民キャンプを訪問。実はこのキャンプでは、昨年エル・システマ・ギリシャが設立されたばかり。受け入れられている約3200名のうち半数が子どもで、なおかつ音楽へのアクセスがほぼ皆無。そのような状況に、ベネズエラ生まれのエル・システマはびつたりだった。ピースボートを通じてエル・システマの輪は世界へと広がっている。



5:船内企画も数多く実施され、乗船者はすっかり彼らの音楽の虜に。6:レッスンは小さな子どもからシニアまで参加。船内で覚えたばかりの日本語で丁寧に教えてくれた。





今回のプロジェクト参加者たちが出航前に記念写真。

「核兵器を禁止するには、市民レベルの活動が非常に大切です。みなさんもお身体を大事にして活動を頑張ってください」。第94回クルーズの寄港地・ニューヨークで面会した中満泉国連事務次長は、国連を訪れたピースボートをはじめとした日本のNGO団体や被爆者団体にそう伝えた。



ロシアではチェルノブイリの記念碑を訪れた。

「核兵器を禁止するには、市民レベルの活動が非常に大切です。みなさんもお身体を大事にして活動を頑張ってください」。第94回クルーズの寄港地・ニューヨークで面会した中満泉国連事務次長は、国連を訪れたピースボートをはじめとした日本のNGO団体や被爆者団体にそう伝えた。

今回のプロジェクトに参加したのは7名。さらに本クルーズからは被爆体験の継承と核なき世界に向けて活動する「おりづるピースガイド」という養成講座を船内で初めて実施し、8名が修了した。被爆者の平均年齢が80歳を超え、消えゆく証言者の貴重な声を次世代に語り継ぐための活動がスタートした形だ。

寄港地の活動では、核兵器禁止条約への賛同と交渉会議参加を各国に求めた。フランスのルーアールを訪れた際は、原発問題に関心のある一般



全21都市で証言活動を実施。



みな真剣に耳を傾け署名してくれた。



第94回クルーズ

## おりづるプロジェクト

ヒバクシャ地球一周 証言の航海

ピースボートでは、被爆国・日本を本拠とする国際NGOとして、核兵器の非人道性を世界に訴え、核兵器を非合法化するための行動として2008年より「おりづるプロジェクト」を実施している。第94回クルーズで10回目となる本プロジェクトでは、広島・長崎の被爆者と共に18カ国21都市で原爆被害の証言を実施。核廃絶のメッセージを世界に届けた。



船内の展示は多くの人が足を止め真剣に見入っていた。

参加者と共に、パリュエル原発とパニリ原発を見学。パリュエル原発の近くに住む原発反対の市民の方々と、ツアーに参加した一般参加者に向け、被爆証言も行った。

船内活動では被爆者による証言会や乗船者による劇など100を超える企画が実施された。中でも「おりづる劇〜つないで、つむいで、未来へ〜」という企画では、被爆者の方が脚本・演出を担当し、20代の乗船者たちが出演。1か月以上の練習を重ねて行われた本番には多くの乗船者が集まった。

本プロジェクトで訪れた全18カ国21都市における活動で集めた国際署名の数は1765筆。第94回クルーズで本プロジェクトも10回目となった。そんな節目となる年に、122の国と地域の賛成により核兵器禁止条約が採択。本当に平和といえる未来が実現するまで、本プロジェクトはこれからも活動を続けていく。

## 感動のベネズエラ寄港

6月22日、ピースボートはベネズエララグアイラ港に寄港。音楽交流プログラム「エルシステマの魅力にせまる」に参加した乗船者は約80名。船内生活と共にしたオーケストラメンバーのルーツであるエルシステマ本部や、ヌークレオと呼ばれる音楽練習所を訪れ、現地の子どもの音楽に触れた。

夕方には、ベネズエラ外務省、カラカス市、カラカス市民オーケストラ、ピースボート共催で「平和と友好のセレモニーコンサート」を開催。カラカス市内にある市立劇場は、ピースボート参加



参加者の音楽経験はさまざまだが、みるみるうちに上達。

者やカラカス市民で満席になった。コンサートではカラカス市民オーケストラを代表して乗船した20名のほか、カラカスで彼らの帰国を待ちわびた仲間たちも合流。総勢100人による演奏に合わせ、乗船者有志によるコーラスが「アルマ・ジャネラ」「ベネズエラ」という曲を共演。最後の一曲が終わると会場中は拍手喝采。そんな中、突如始まったのはなんとソーラン節とクルーズ出航テーマ曲のサプライズ演奏。思ってもいなかったプレゼントに、みな涙を流し、ホール全体が感動に包まれた。「また会う日まで」そう言って彼らとの72日間は幕を閉じた。

ベネズエラオーケストラの次回乗船予定は第102回クルーズ。また会うその日まで、彼らは今日もベネズエラ市民のために音楽を奏で続ける。



1:カラカスでは子どもたちの音楽練習所を訪れた。2:彼らの表情から真剣さも伝わる。3:メンバーはもちろん日々の練習も欠かさない。4:楽器は難しくてもコーラスなら多くの乗船者が共演。

無料音楽教育プログラム

El Sistema

エル・システマ



総勢100名の演奏は圧巻。満席のカラカス市立劇場は、素敵な音色に包まれた。





1:インドネシアのビールといえばビント。2:小さい子から大人までみな毎朝のお祈りは欠かさない。3:運がよければ街中でお祭りが見られる。



## 宗教なしには語れない 信仰と芸能の島

インドネシアの8割以上の人々はイスラム教を信仰している。そのような中、バリ島だけがバリ・ヒンドゥー教という独自の宗教で成り立っていることはあまり知られていない。もともとインドネシアはインドとの交易が盛んで、ジャワ島を中心にヒンドゥー教が広がつていた。しかしその後マレー半島経由で伝わってきたイスラム教がインドネシアで勢力を拡大。結果としてジャワ島のヒンドゥー国家が倒され、彼らがバリ島に逃れてきたことで、バリ・ヒンドゥー教の島ができあがった。

この島に住む人々の生活は朝のお祈りから始まる。街を歩いていると、1日3回するの良いとされるこのお祈りのシーンに巡り合うことも多い。さらにこの島でよく見かけるのが、チャナンといわれる供物。椰子の葉で編まれた小さな皿の中に色とりどりの花が盛られ、台所や玄関をはじめ車や仕事道

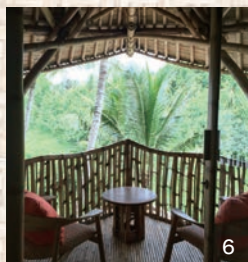


女性の正装は「クバヤ」と呼ばれるものを着る。

具まで、神々が宿るとされるすべてのものに供えられている。彼らがこのような信仰の力を特に発揮するのはお祭りのとき。神様に美しいものを見せようと、舞踊や供物づくりに力を注ぐ。バリの伝統舞踊といえば躍動的な音色で奏でられる「ガムラン音楽」が有名。さまざまな金属打楽器が生み出す美しい音色を聴くと「神々が宿る島」にやつてきたことを実感するだろう。

宗教には厳しい彼らだが、私たちがバリ・ヒンドゥー教に尊敬の念を持っているとわかると、あたたかく迎えてくれる気さくな人々でもある。そのため、寺院を訪れる際にはTシャツ、ジーンズなどカジュアルな服装ではなく、バリ人と同様の正装をしたり、お供えの花を持っていたりするのが望ましい。他にも神に近い存在とされる3歳までの幼児の頭部を触つてはいけなかったり、不浄の手とされる左手で握手をしてはいけなかったりとタブーは多いが、それらを気に留めていればきつと親しくなれるはずだ。

ナビィさんも「バリの魅力は人。ぜひ現地でバリの人々と会話し、バリ芸能を肌で体験してほしい。そのことで、この島だけに根付いた彼らのアイデンティティや宗教観、そして彼らの人間性に触れることができるはず」と話す。1日も過ぎせば、この島が世界中の旅人を魅了し続ける理由がきつとわかるはずだ。



4:チャナンと呼ばれる供物は各家庭で毎日神様に捧げられる。5:お祭りの前になると、村中の女性たちが供物の用意に精を出す。6:緑に囲まれ島全体にゆったりとした時間が流れる。



## ナビィ 寿[kotobuki]

ナーグクヨシミツと共に寿[kotobuki]でミュージシャンとして活躍中。沖縄、八重山の島唄とバリダンスをこよなく愛し、現在はインドネシア・バリ島に在住。ピースボートに水先案内人として何度も乗船している。



バリの楽器は日本で見かけないものばかり。



ミーコレン、ナシコレンなど辛めの味付けがバリ島の特長。



善と悪の果てしなき戦いを踊るパロンダンスは見ている飽きることがない。



2018年3月、ピースボートクルーズの原点であるアジアをめぐる47日間のグランドクルーズが启航。18年ぶりの寄港となる東ティモールや、クルーズならではのハロン湾周遊に加え、最大の見どころの一つが「神々が宿る島」とインドネシア・バリ島。現在バリ島に住み、アーティストとして活躍するナビィさんにこの島の魅力を伺った。

寄港地フォーカス



インドネシア・バリ島

BALI

Indonesia





# ほんとうの「ごちそう」って？

違いをちがいとして納得すること

料理研究家 枝元なほみ

料理研究家として、テレビ、新聞、ラジオなど幅広く活躍する枝元なほみさん。最近では、全国各地をまわるうちに「食」を考えるには農業や漁業などの生産の現場を支えることが必要だという思いに至り、生産者と消費者をつなげる一般社団法人「チームむかご」を設立。ピースボートには、これまでに第83回、第91回世界一周クルーズに水先案内人として乗船している。そんな枝元さんに普段の旅との違いやピースボートの食事について話を聞いた。

## ✪旅行というより

### そこに暮らしている感覚

「ピースボートに乗っていると、明日なにしてようかなって思いながら毎日寝るんです」。枝元さんにピースボート乗船の感想をたずねると、笑顔でそう振り返る。興味のある国には一人で旅に出ることもあるという枝元さん。ピースボートのことは知っていたものの、いざ乗ってみると普段の旅との違いを肌で感じたという。

「二人旅だと明日の宿泊先はどうしようとかいろんな不安もあるんです。でもピースボートは毎日の寝る場所も決まっているし、旅行というよりもそこに暮らしている感覚に近かったんです。

世界のいろんな寄港地に行けるという楽しさはもちろんですが、やっぱり船上を楽しめるというのがこの旅の最大の魅力かもしれません」

料理研究家である枝元さんにとつて、寄港地の楽しみはなんといっても食。印象的だった港町をたずねてみると、各地それぞれ思い出があるけれどドイツのハンブルクかな、と。「ハンブルクで食べたのは、ニシンの酢漬け。スタイリッシュにカットしてあつて、お店の雰囲気もすごくよかったです。ほかにもパンの焼き加減がすごく上手で、寄港地のお店選びは毎回真剣勝負です」

さらに世界中の港町を巡るというこ



いしかったです。自分の家の暮らしよりずっと健康的なものが食べられる」と満面の笑顔。「夕飯は和食中心のものが出ますし、自分で食べたい食事や量を組み立てられるからすごく健康的です。それに4階のレストランで案内されるテーブルでは毎回知らない人と話せるので交流がすごく楽しかったです」。

レストランは枝元さんにとつても乗船者との貴重な交流の場の一つとなったが、驚くことに二度目の乗船となった第91回クルーズでは、枝元さん考案の特別メニューが出されたという。「料理長と相談して、レストランの夕食で、ゆり根のバターソテー」の小鉢を出してもらったんです。それに洋上居酒屋の波へいでは「ししとう炒め」も採用していただきました。一つひとつの料理を丁寧につけてくださって、本当においしかったです」

## ✪「食」がテーマの講演活動

このようにピースボートならではの船旅を存分に楽しんだ枝元さん。船内では世界の食に関する講演活動を精力的に行った。「私が乗ったクルーズがアジアを起点に最後は南米を巡る航路だったので、それに沿って世界の食文化を紹介しました。世界は大きく4つの食の文化圏に分かれるのですが、ただ文化とか環境が違うというだけで、そこにいいとか

## Life Onbord



枝元さんの講演は毎回大人気。世界が直面する食料問題や遺伝子組み換え食品、生産国と消費国の関係性など、講演の内容は多岐に渡った。



「こたえて枝元さん!」という企画では、出汁の取り方から世界の食を訪ね歩いた日々まで、参加者からさまざまな質問が寄せられた。



枝元さんが代表を務める「チームむかご」では、「食」に真剣に向き合い、日本全国で農業支援や被災地支援といった活動を行なっている。



の船旅のスタイルにも心底惚れ込んだ様子。「港に着いてそのまま街に出かけるというのもすごく好きなんです。港街には古くから船で来ている人たちを受け入れている独特の雰囲気もあります。それに私の祖父が氷川丸の船乗りだったこともあり、船乗りの血が騒ぐとも言っていました(笑)」

## ✪船内の食事には大満足

乗船を検討している人にとって気になることのひとつが船内の食事。料理のプロである枝元さんに、率直に船内の食事の感想をたずねると、「すごくお

話については、「大切な人に『食べてほしい』と思えるもの、それこそが本当のおいしい料理でもあるし、ごちそうだと思うんです。どちらの料理がおいしいとかではなく、大事なものは違いをちがいとして納得すること。これは旅することにも似たようなところがあります。実際に旅をするといろんなところでいろんな人が生きているんだと感じるんです。そういう多様な価値観の中に身を置いて、いいも悪いもなく、同じその時間を共有できるというのがきつと旅の面白いところだと思います」

## ✪旅をどう彩るかは自分次第

最後にこれからピースボートに乗船する方へのアドバイスを聞くと、「さまざま不安があると思いますが、ずっと不安なままで旅には出られないと思うんで

す。旅は予想外のことが起こるからおもしろい。何でも自分で決められるのが旅の良さですし、ピースボートも24時間の過ごし方を自分で決められる。けど生活に不自由しない環境は整えてもらっている船なんだと思います。例えば自分で毎晩ごはんを作らなくてもいいし、港に着いて野菜とか肉とか全部自分で買い集めないといけないということはありません。毎日を過ごしやすいようにすごく上手にサポートしてくれるけど、その旅をどう彩るかは自分次第」

24時間全部を自分のために使っているって、大人になってからなかなかないことだからね、と最後に笑顔で話してくれた。世界中にあふれる「おいしい」や「楽しい」といったものに触れ、違いをちがいとして納得できること。ピースボートは世界一周をしながら、そんな大事なことを教えてくれる船旅なのかもしれない。







1:ユニフォームも一新。何度か通えばスタッフとも顔なじみに。2:いつでも新鮮な魚が食べられるのはうれしい。3:世代を超えて盛り上がることも。



と日本の居酒屋と変わらない。メニューも枝豆や冷奴をはじめとした品料理から締めめのラーメンやうどんまで種類も豊富。17時からオープンしているため、夕食代わりに来る人も多い。

船内企画で仲良くなったメンバーとの打ち上げや誕生日パーティーで使われることも多く、予約をすれば寿司桶を用意することも可能だ。最近では船内にあるバイア・ラウンジでカラオケを楽しみながら波への料理を食べられたり、バー・カサフランカでウイスキーに合うおつまみをオーダーできたりと、波への楽しみ方はいろいろ。



4:大人数の場合は豪華な寿司桶が人気。5:牛サーロインステーキは若者に好評。6:チーズ盛り合せはお酒との相性もぴったり。



店長の田村悠さんも「いかに飽きさせないかを常に工夫しています。食べたメニューに関するご相談にも、できるだけ応えていきたいと思っています」と話す。過去には実際に乗船者からのリクエストで「揚げにんにく」が採用されたこともあるという。

第94回クルーズからは、カウンター席も新設。焼酎などのボトルキープも可能だというから、ひとりでゆっくり飲みたいときにも最適だ。ピースボートという1000人の村にある一軒だけの居酒屋「波へい」。船に乗ったらまず訪れてみたい名店だ。



ピータン豆腐は根強い人気。定番から期間限定までメニューは充実。



寄港地で仕入れた生ハムを使った大人気の生ハムグリッシーニ。



## 人気メニュー BEST 3

波へいでメニューに迷ったらまずこの3品。田村さんも自信を持っておすすめするメニューをご紹介します。



第1位

波へい丼

ここでしか食べられない特製の海鮮丼。なんといっても鮮度が売りだ。



第2位

広島産カギフライ

「まさか洋上で食べられるとは」という声が特に多いこだわりの逸品。



第3位

波へい特製パフェ

最近のクルーズから出されるようになった新定番。若い女性に大人気。

他にもご飯ものや麺類もたくさん揃っています！



## 洋上居酒屋「波へい」にいらつしやい！



旅で出会った仲間たちと楽しく賑やかに一杯やりたい。そんな方々で連日賑わうのが洋上居酒屋「波へい」。日本酒や焼酎も多く取り揃え、お品書きはまるで日本の居酒屋そのもの。毎日17時から深夜まで営業し、乗船者の憩いの場所となっている。

波へいの魅力をご紹介します！



店長の田村悠さん。自身も乗客としてピースボート地球一周の船旅を経験。乗船者の気持ちもわかる「食」に関する心強い味方だ。

地球の裏側にいても日本酒、焼酎、お刺身、お寿司を楽しんでもらいたい。そういったコンセプトで始まったのが洋上居酒屋「波へい」だ。もともとは船のデッキにぼつりと赤ちようちんを提げて始まった小さな屋台が波へいの原点。今より15年以上も前にチャーターしていた船の頃から人気が出始め、今のスタイルになっている。

波へいで楽しむことができる料理は和食をメインに、旬の食材や寄港地にちなんだメニューが並ぶ。こだわりはなんといっても鮮度。寿司や刺身などで使われる鮮魚は築地市場で仕入れたものをマイナス60度の特別な冷凍庫に入れ、常に新鮮な料理を提供している。野菜や肉は寄港地で仕入れることも多く、生ハムやムール貝といった食材はバルセロナをはじめとした代表的な寄港地で仕入れ、期間限定メニューとして登場する。

そして波へいのもう一つの特長が、お手軽な価格。生ビールのジョッキは450円、日本酒は1合400円から



# 船上百景 [ 星空鑑賞会 ]

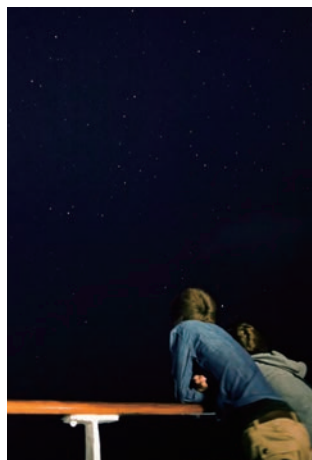


流れ星が見えるたびに乗船者からは、わあっと歓声があがった。

## 思わず見惚れてしまう 洋上のプラネタリウム

今日くらいは、ゆつくり星空を眺めてみよう。そんなコンセプトのもと、プールデッキで開かれた「星空鑑賞会」。普段は明るく照らされているデッキの照明が落ちると、浮かび上がったのは数えきれないほどの星々。さらにじっと見つめると、ひとつ、またひとつと流れ星が横切る。日本にいたときには見ることができない満天の星空に参加者は大興奮。

この企画に参加していた60代の男性に話を聞くと「船内新聞を見てこの企画のことを知りました。普段は部屋にすることが多いのですが、この時間のデッキは夜風が心地良いし、まるで洋上のプラネタリウムにいるみたいですね。直前まで飛行機の旅と迷っていたのですが、船旅を選んで正解でした」と大満足の様子だった。世界中の星空を堪能できるのは、地球一周の船旅を選んだ者だけが味わえる最高の贅沢だ。



この鑑賞会は老若男女問わず大人気。

「如己愛人」(によこあいじん)。己を愛するが如く隣人を愛しなさい——長崎で被爆し、最愛の妻を失いながらも救援活動を行い、6年後に白血病で命を落とすまで恒久平和を祈り続けた永井隆博士の言葉です。

今号でも掲載しましたように、ピースボートでは博士と同時代を生き抜いてきた170名を超える被爆者の方々と共に世界中で非核不戦のメッセージを訴えてきました。そんななか、今年7月に採択された核兵器禁止条約はとても重要な決議となりました。

しかし世界は未だに混沌としています。永井博士が今の時代を見たならば、「己の国を愛するが如く隣国を愛しなさい」と仰るような気もします。これは簡単なことではありませんが、まずは相手のことを知り、過去の歴史を学ぶことから始めていきたいものです。

アジアの人々と共に国境線のない大海原をゆくピースボートの船旅だからこそできる体験は、未来の平和につながっていくと信じています。(N・I)

